

## 日本の結核史における第二次世界大戦と BCG 研究について

渡部 幹夫

順天堂大学医療看護学部

『結核統計総覧 1900~1992』（結核予防会 1993 年刊）を基に日本の結核統計値をグラフ化すると、日本の結核の歴史がよくわかる。日本は現在もいまだ結核については中度蔓延国にあるといわれる。日本の近代および現代の結核医療史・社会史そして歴史疫学については多くの研究がある。しかし第二次世界大戦末期の結核病学の歴史的研究は、この期の資料の散逸や不完全さもあつた史的研究の蓄積が少ないように思われる。

結核統計総覧によれば日本の結核死亡率（人口 10 万対）は 1918 年の 257.1 から 1932 年の 179.4 を低値として 1943 年 235.3 まで増加している。戦後は 1947 年 187.2 から減少して結核実態調査の行なわれた 1953 年は 66.5 となっている。男女 5 歳毎の結核死亡率の記録がある。1918 年に最も高いのは 15-19 歳女性の 618.6 であるが 1932 年には 404.0, 1943 年 417.9, 1947 年 226.8, 1953 年は 36.1 であった。第二次大戦中にもっとも高い死亡率を記録しているのは 20-24 歳の男性である。この層の男性は 1918 年 492.9, 1932 年 432.9, 1943 年 822.1, 1947 年 465.8, 1953 年 67.7 である。結核の主たる犠牲者が若い女性から兵役期の男性に変化したことがわかる。兵役につく男性を結核から予防することが強兵政策としても重点的課題であつたと考えられる。

今回、ワシントン DC のアメリカ合衆国議会図書館において『陸軍軍医学校防疫研究報告第 2 部』の原本を見る機会を得た。この書は日本では議会図書館本のマイクロフィルムをもとに復刻出版されている。その中に BCG 研究に関わる林武夫の 9 論文があり、同氏は他雑誌にも乾燥 BCG ワクチン製造の研究を発表している。陸軍軍医学校の研究主題の含む問題から、これらの戦中の基礎的研究には言及しないことが多いようであるが、1955 年に朝日賞を受けた柳沢謙らの【乾燥 BCG ワクチンの製造に関する研究】のさきがけ的研究と思われる。

林武夫の雑誌論文 13 篇および博士論文を読むことが出来たのでその研究について考察する。『陸軍軍医学校防疫研究報告第 2 部』『日本医学』『日本医学及健康保険』誌の論文と東北大学提出の博士論文である。博士論文は『B.C.G. に関する実験的研究』であり「各種接種法による免疫試験」「超音波ワクチンによる免疫試験」「保存ワクチンによる免疫試験」「乾燥ワクチンによる免疫試験」の 4 篇と付録小冊子『B.C.G. 乾燥ワクチンに関する研究』よりなる。小冊子には「生存試験」「免疫試験」「人体接種成績」の 3 篇が掲載されている。「人体接種成績」のみ他誌への報告が不明である。軍隊において長期に有効な BCG ワクチンの製造・保存・供給の必要性があり始められた研究と考えられる。人体接種成績について昭和 19 年 4 月の論文では、BCG 凍結乾燥ワクチン接種を某集団、多数集団、実地応用の 3 段階ですすめたとしている。某集団への 3 ヶ月保存ワクチン接種後 1 年における有効成績の報告に終わっており、多数集団への接種と実地応用の報告はない。後に大林容二は『BCG 接種の理論と実際』の中で、乾燥 BCG ワクチンの対照比較試験は実施不可能でありほとんど行なわれていないので、林の軍隊における成績が唯一のものであろう、としている。林の研究は、戦後の日本の結核対策において主役となつた BCG 接種、特に凍結乾燥 BCG ワクチンについての基礎的研究と考えられる。

本研究は科学研究費補助研究（米国国立医学図書館等の所蔵の日本古医書の調査データベース作成：代表者 酒井シヅ）および（日本の医療史における社会の転換と医療技術の連続性の研究：代表者 渡部幹夫）の一部として行なつたものです。